

一九六八年の『濃緑』は、体育会と政治的活動にもふれています。そのころの体育会は、文化サークル連盟、名大祭本部実行委員会、自治会とともに学園政策委員会を構成していました。一九六八年度には部室設立運動を実施し、武道館関係クラブ、応援団の代表が武道館設立準備委員会を組織し、二階建ての武道館建設を要求しました。また蓼科高原気候医学研究所跡に建設される宿泊施設に対する要望事項をとりまとめる「蓼科高原山の家委員会」も組織しています。さらに課外体育検討準備委員会をつくり、学生部長と学部代表教官からなる体育委員会に常時三名の学生代表を参加させていました。

三七〇年代の体育会

◆体育会と学生スポーツの変化

一九七二年山岳部は、現役学生四名を含む七名の西ネパール遠征隊を派遣しました。ジェイ・ボウラニ峰（六九四〇M）の頂上には到達できなかったものの、現地名の確認、地図の訂正などの成果をおさめています。しかし七〇年代になると中部地区の私立大学運動部の実力



総合体育館とプール（1970年代）（附属図書館医学部分館所蔵）

が向上し、伝統的に強豪であった名古屋大学をはじめ
 国立大学の運動部の凋落ちようらくもはじまっています。このこ
 ろから体育会運動部に入部する学生が減少するととも
 に、リーグ戦などにおいて二部リーグに落ちるクラブ
 が増加してきました。一九六〇年代後半には一五〇〇
 名以上いた運動部員が、一九七一年には一〇〇〇名の
 大台を割っています。当時総入学者数が一五〇〇人台
 で推移していたにもかかわらず、部員数は一九七二年
 には、八八三人と毎年減少しています。このような運
 動部衰退の理由には、「多様化・個性化の時代」、「エ
 ンジョイ」という言葉に象徴されるように、①クラブ
 活動の魅力の相対的減退、②同好会の増加、③脱組織
 志向型の学生の増加にあると考えられます。

◆スポーツサークルの萌芽

いっぽうで体育会が主催する各種スポーツ大会への

参加者は多く、この頃から体育会的スポーツ形態よりも娯楽的なスポーツ形態を求める学生が増えてきたことを示しています。『濃緑』には、早稲田大学の事例がとりあげられ、名古屋大学にも体育会の運動部以外に同種目の同好会（スポーツ系サークル）が誕生するだろうと書かれています。

体育会では、同好会の結成を日常的にスポーツ活動をこなう学生の増加であると前向きに理解し、施設・技術・金銭面で援助を与えていくべきであると考えていました。しかし一九七一年頃から、体育会会員で運動部に所属しない学生を「一般学生」として表現するようになり、「会員」を「運動部員」に限定する意識、つまり同好会に所属する学生と運動部所属の学生とを区別する意識も芽生えつつありました。

◆体育会財政強化とスポーツマネジメント

一九七〇年代の体育会は、財政が安定していたわけではありません。体育会では財政強化策も考えていました。たとえば、会費の値上げをはじめ、大学側による入会金の完全徴収という方法が提案されています。またプロのアーティストの興行を実施し、興行収入による財政強化をはかろうとする案もありました。そのほか企業スポンサーを募集する後援会組織の設立も考えられていました。これらの案は現代のスポーツマネジメント顔負けの手法です。

実際、一九七三年度には営利事業として、愛知文化講堂で本田路津子と森田公一&トップギヤランのコンサートを開催しています。同コンサートには一〇〇〇人あまりの入場者が集まり、一〇万円程度の利益を上げています。しかしチケットを体育会が販売することは自己負担が多く、その割に利益が少なかったようです。現在のようにレジャー志向が高くなかった当時において音楽会をプロデュースするような文化事業には多くの苦労があったと思われる。

◆体育会と社会の交流

七〇年代のワンダーフォーゲル部では、参加者を広く一般から募る「オープンワンデリング」を実施していました。これは大学の地域開放という点で画期的な企画です。学外者も含め一〇〇人近くの参加者が、鈴鹿の宇賀溪でのキャンプを楽しんでいます。またヨット講習会も学外からの参加を受けつけていました。今でも名大祭は本学学生以外に公開されていますが、名大祭期間中に実施されたマラソン大会には、学生以外の参加もあつたようです。

◆大学における課外体育活動の位置づけ

体育会のなかには、部員の会費だけではまかなえない高価な備品を必要とする運動部があります。たとえば馬術部がそれにあたります。一九七一年には、馬術部の馬の飼料代助成の問題

とかかわって、馬を備品とするか否かの議論がありました。このとき本部体育委員会では、大
学側がクラブ活動への援助する根拠となる「課外体育活動」の明確な位置づけがなかったため、
「課外体育活動」の意義について検討することとなりました。当時の大学当局は、文部省が課
外体育活動の意義を認め、予算措置をとることがない限り、クラブへの公的な助成はできない
としていました。

◆体育会での事件・事故

一九七一年に、馬術部の厩舎と馬七頭を焼失する事故が起きてしまいました。また航空部の
部員が合宿参加の移動中交通事故死する事故もありました。そして事故死した学生の両親が損
害賠償を請求する訴訟を国に対しておこないました。この事故では学生の課外活動に対する大
学の責任が裁判で争われました。また一年後の同じ日である一月二五日に体育会のクラブハ
ウスが焼失する事故もおこりました。こうしたこともあつて、一月二五日は体育会にとつて
不吉な日として『濃緑』に紹介されています。

◆新しい運動部

レジャーも多様化してきた一九七〇年代にはいくつもの新しい運動部が生まれました。その

表2 体育会結成以前に設立した運動部

卓球部	昭和24年設立
準硬式野球部	昭和25年設立
剣道部	昭和25年設立
柔道部	昭和26年設立
体操部	昭和26年設立
女子バレーボール部	昭和27年設立
ハンドボール部	昭和28年設立
アイスホッケー部	昭和29年設立
バドミントン部	昭和30年設立
航空部	昭和30年設立

表3 体育会結成以後に設立した運動部

日本拳法部	昭和32年設立
ライフル射撃部	昭和32年設立
スキー部	昭和32年設立
弓道部	昭和33年設立
自動車部	昭和34年設立
ワンダーフォーゲル部	昭和34年設立
ゴルフ部	昭和35年設立
空手道部	昭和36年設立
応援団	昭和37年設立
舞踏研究会	昭和37年設立
少林寺拳法部	昭和43年設立
アメリカンフットボール部	昭和50年設立
女子バスケットボール部	昭和51年設立
合気道部	昭和54年設立
ソフトボール部	昭和57年設立
オリエンテーリング部	昭和59年設立
フィギュアスケート部	昭和63年設立
ラクロス部	平成6年設立
トライアスロン部	平成6年設立
ボクシング部	平成6年設立
アーチェリー部	平成11年設立
軟式野球部	平成6年準加盟

ころ新しく登場してきた運動部にはボーリング同好会、舞踏研究会、名大ユースホステル同好会などがあります。一九七五年四月に結成されたアメリカンフットボール同好会は、創部後三年目にはBブロック（二部リーグ）優勝、そして六年目には東海リーグAブロック優勝を飾っています。

またこの頃には女性のスポーツへの参加も進み、応援団バトン部が結成されました。少林寺拳法部には女子部員第一号が一九七八年度に登場しています。